



次回例会のご案内

是非ご出席ください！ 課題を共有しませんか？

日時▶ 2月7日(月) 午後7時～9時

会場▶ 愛宕町教会

奨励▶ 大矢真理 牧師 (山梨八代教会)

発題▶ 「矯風会活動と慰安婦問題」

森川茂子 姉 (女性の人権サポート・くろーば一代表、矯風会会員、山梨八代教会員)

3 ページより続き

と日本の若者たちの交流が毎年行われています。戦後初めての中央委員会では、戦時中における責任について戦争の歯止めになり得なかった反省を語り合いその後の平和運動の柱としてきました。過去の歴史を直視することを恐れず、アジアの一員として、特に東北アジアの隣人と共に平和と信頼の道を歩むことを求めてきました。今期「アジア・太平洋戦争の謝罪と未来に向けての決意表明文」を出しました。一部を読みますと「日本 YW は日本軍国主義の下で侵略戦争に協力するという重大な過ちを犯しました。世界 YW との交流をやめ、国際団体としての特質を失い天皇を神とする国家神道に妥協しキリスト教団体の本質を歪めていきました。日本の不当な国家戦略の一翼を担ったことを心から謝罪いたします。(中略) イエス・キリストに学ぼうとする私たちは過ちを二度と繰り返さないために『沈黙は過去の過ちを繰り返すことである』との認識に立って軍事大国化を許さないために声をあげ日本政府に対して粘り強く働きかけていきます。また非核、非暴力による平和を構築するための平和教育を展開します。そして暴力のない未来に向けて世界の YW と共に、特にアジア太平洋地域の YW と連帯して対話による平和と和解への道を歩み続けていく決意を表明いたします」。この決意表明は、中国、韓国 YW にも勇気ある決断と認められ今後の活動がより一層深められるようになりつつあります。

甲府 YW の抱えている問題はいくつかありますが、会員、賛助員とも少しずつ増加してきており、現在会員は 23 名。賛助員 51 名、男性会員(会友) 1 名、団体 1 教会となっています。一時消滅の危機にあったことを思い出すと夢のようです。世界の YW では各 YW の意思決定機関〈役員会〉の 25% を 30 歳以下の若い女性にするよう定めております。日本 YW では 30 歳以下会長はじめ副会長、運営委員も 30 歳以下が 25% です。しかし地域で若い方を増やすことは難しく、甲府では山梨英和 YW との交流がありますが、県外へ進学すると YW との関係は終わってしまいます。出来るだけ活動を続けてほしいと、「YWCA パスポート」という日本全国の YW の紹介や活動を記載したものを発行して卒業時に差し上げています。

会館を持っていない甲府 YW は、会員がいつでも集まれる場所が与えられることを願っています。

日本 YW では 1970 年からキリスト教基盤に立ってオー

ブンメンバーシップをとりノンクリスチャンも一緒に運動を担う決意をしました。甲府 YW では例会時は礼拝で始め「聖書の会」をもってキリスト教基盤に立つ基としています。現在、甲府 YW では 2/3 の会員がクリスチャンで賛助員の多くが教会関係や英和の卒業生です。各地の教会にもご協力いただけて良い環境で大変ありがたいと思います。

YW の財産は人であると言われています。甲府 YW では教育に携わって来られた方が多いので、それぞれの分野でタラントを生かして働けるプログラムが可能です。昨年これまで全国的に展開してきた活動を先輩会員から受け継ぎ未来を担う若い女性のリーダーシップを育て、世代を超えた YW の活動の素晴らしさを伝えるために、広くシニア会員を推薦する「Y's Wonderful Women 賞」が設けられました。甲府からはみんなの憧れの明るく元気な神津喜美子さんを推薦しました。いつもおしゃれな装いで、ワープロで打った散文詩の小冊子を毎年つくり、洋裁やガーデニング、家事も見事になり 90 歳過ぎて素敵なお一人暮らしをなさっておられます。その神津さんのお姉様で初等教育会のお世話をした時代から会長としても熱心に活動した角田智慧子さんは、もう亡くなりましたが、40 年誌に「生き甲斐のある幸せな思い出ばかりでした。もう日は沈みつつあります。最後まで私は YWCA の会員なのです。歌いつつ終わりたい」と書いておられます。他にも初代会長として活躍された榎本愛子さん、英和 YW 顧問や会長として尽くされた村上三佐保さんなどの諸先輩を紹介出来ないのが残念ですが、しっかりとした信仰によって甲府 YW の基礎を築いた諸先輩のおかげで今の活動はあると感謝です。

甲府 YW の記念誌には「ぶどうの枝」というタイトルがついています。ヨハネによる福音書「わたしはぶどうの木あなた方はその枝である…」会員一人ひとりがしっかりとその枝に繋がってその養分を十分にいただいて働きたいという願いから付けられました。

今日のために「日本 YWCA100 年史」と 3 冊の「ぶどうの枝」を読み返しました。いつの時代にも女性がその知恵と力を十分に発揮して、常に社会のことに目を向け、戦いや暴力のない平和で安全な世界を目指して積極的に運動を進めてきた歴史です。そのことを誇りに思って、これからも活動していきたいと思います。

お詫び・訂正

ニュースレター第 6 号、2 ページ「第 7 回例会発題報告」欄、発題者大木正人氏の肩書きを「山梨英和中学校・高等学校宗教主任」に訂正して、お詫びいたします。

編集後記

☆会報 7 号をお送りします。遅くなりましたことをお詫びいたします。毎回良い発題に啓発されております。今年は新しくご参加くださる方が増えることを願っています。(清藤記)



Tomosibi

灯

山梨県キリスト教連絡会

2009 年 10 月設立 代表：小島章弘

事務所▶ 〒 400-0024 甲府市北口 3-4-23 日本基督教団 愛宕町教会内 Tel 055-253-3150

NEWS LETTER N0.7

奨励：荒又敏徳 牧師 (聖書：ヘブライ人への手紙 第 11 章 1 節～7 節)

信仰とは、望んでいる事柄を確信し、見えない事実を確認することです。昔の人たちは、この信仰のゆえに神に認められました。信仰によって、わたしたちは、この世界が神の言葉によって創造され、従って見えるものは、目に見えているものからできたのではないことが分かります。信仰によって、アベルはカインより優れたいけにえを神に献げ、その信仰によって、正しい者であると証明されました。神が彼の献げ物を認められたからです。アベルは死にましたが、信仰によってまだ語っています。信仰によって、エノクは死を経験しないように、天に移されました。神が彼を移されたので、見えなくなったのです。移される前に、神に喜ばれていたことが証明されていたからです。信仰がなければ、神に喜ばれることはできません。神に近づく者は、神が存在しておられること、また、神は御自分を求める者たちに報いてくださる方であることを、信じていなければならぬからです。信仰によって、ノアはまだ見ていない事柄について神のお告げを受けたとき、恐れかきこみながら、自分の家族を救うために箱舟を造り、その信仰によって世界を罪に定め、また信仰に基づく義を受け継ぐ者となりました。

ヘブライ人への手紙 第 11 章 1～7 節

今晚、ここに山梨県キリスト教連絡会の集会を開き、それぞれのキリスト者の取組みや課題を共有する場を与えられる時を過ごそうとしています。その前に共に聖書の言葉から神のみ心に思いを向ける礼拝をささげる姿勢を大切にしておられることを、ここ 3 回ほど出席させていただいてとても印象的に感じています。

ともすれば私たちは目の前にある身近な取組みや課題にのみ目を奪われて、目に見えない神の出来事、信仰の出来事を知らず遠ざけてしまいがちであります。しかしこうして私たちが一つ所に集まるのは、決してそれぞれが取組んでいるもの、課題とする事柄が個々の問題としてあるとするばかりではなく、それを超えてまさに神に喜ばれるところの信仰の歩みをしているのだ、ということをおぼれさせません。時に離れている者同士であり、それぞれに違った問題、課題を抱えておりますが、信仰において一つであることを覚えて、違いがあるからこそ互いの意見の交換ができ、知恵を出し合うこともできることを私はこの集会に出て感じたことであります。

★

今晚、礼拝にあたり、ヘブライ人への手紙 11 章 1～7 節の言葉を聞いていきたいと思います。この個所はまず、「信仰とは、望んでいる事柄を確信し、見えない事実を確認することです」(1 節)と信仰の事柄が述べられ、続く個所には旧約聖書に出てくる主だった人々の信仰による歩みが記されています。ここに信仰によって歩んだ人々のまさに足跡が残されていると言ってよいのです。私はここに出てくる人々の歩みをこのヘブライ人への手紙によってたどりながら、一人一人がまさに違った歩みをしていることに気が付きました。アベル、そしてエノ

ク、ノア、アブラハムさらにはモーセにまで及んでいくのですが、それぞれに神との出会いがあり、神を信じて歩いていく、そのあり様が違っているのです。その違った歩みが、「信仰によって」という言葉に収められているのです。

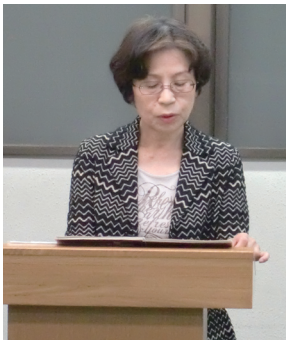
今日の教会に連なる私たちもまた、同様ではないでしょうか。日々、私たちの活動する場や仕事はそれぞれ違っており、感じ方、考え方も異なっています。環境によっても変わってくるのかもしれませんが。でも今、神はここにおいて私たちを一つ所に集めてくださっています。ここで神は私たちを喜んでおられることを、「信仰がなければ、神に喜ばれることはできません。神に近づく者は、神が存在しておられること、また、神は御自分を求める者たちに報いてくださる方であることを、信じていなければならぬからです」(6 節)の言葉で覚えたいと思います。信仰によって生きる者を神は喜んでいたもうのです。この信仰は私たちが強めたり、弱めたりすることのできる信念のようなものではなく、むしろ神への信頼に他なりません。弱く、乏しく、欠けだらけ、失敗だらけの歩みに過ぎない。だからこそ神に助けを求めざるを得ない。よりすがらざるを得ない者を神は喜んで迎えてくださっているのです。神はそのような者を用いてご自身の御計画を進められるのです。

ここに信仰によって歩む者がいる。それをこよなく喜んでおられる神が私たち一人一人をお造りくださり、まさにこの場をも用意してくださってお集めくださったのであります。天地創造の神は私たちをも造り、生かし、私たち一人一人の限界をこえて完成にまで導きくださることを覚えて共にみ名をあがめたいと思います。

第7回例会 発題報告

平和を実現する人は幸いである－YWCAの活動について－

山本貴美子氏（甲府YWCA会長・南甲府教会員）



YWCAのことをお話する機会をお与え下さり感謝です。歴史については、日本YWCA100年史と甲府YWCA40年、50年、60年誌からお話したいと思います。今日はYWCAとご紹介いただけましたが、いつもYMCAと間違われてしまい、知名度の低さがっかりしております。

YWCA（Young Women's Christian Association）は、以前の名称はキリスト教女子青年会でしたが、世界YWCA会則に準じて「YWCA」（以下YW）と名乗ることになりました。世界YWの歴史をお話ししますと、19世紀英国、産業革命時代、農村から都会へ出てきた若い女性たちを支えようとYWを名乗る2つのグループが活動を始めました。エマ・ロバーツは急激な工業化がもたらす価値観や生活の変化の波にさらされる若い女性の状況に心を痛み、女性たちが自分の生き方を振り返り、神の前に祈ることが必要だと考え、祈祷会を始めました。また、メアリ・ジェーン・キナードはクリミヤ戦争に赴く看護師などのためにロンドンに宿舎を作り、宿泊だけでなく、聖書クラス、教育プログラム、カウンセリングなど、働く女性のための活動をしました。この2人が1876年頃ロンドンで出会い、「YWCA」という名の運動を一つにし信仰に根ざす活動を発展させようと、1884年正式に中央委員会を組織しました。

YWは初期の頃から福音主義、超教派、ボランティア、リーダーシップ、伝道という、その後のYWの特徴となるものを持っていました。イギリスに始まったYW運動は10年後にはアメリカ、ノルウェイ、スウェーデンにも広がり、この4カ国が世界YWを組織しました。1898年にはカナダ、イタリヤ、インドを加えた7カ国326人の代議員により、第1回世界大会が開かれ、世界YWの標語「万軍のエホバのたまふ是は権勢（いきおい）に由らず能力（ちから）に由らず我霊に由るなり」（ゼカリヤ書4・6）が掲げられ万国祈祷週の実施も決められました。このYW全員が同じテーマで祈る「祈祷週」はYM・YW合同祈祷週として、現在に至るまで世界中で続けられております。

日本YW発足時の第一の行事も「祈祷週」でした。甲府でも山梨YMと毎年11月に続けております。世界YWは現在125カ国余り、2,500万人の会員がおり、本部はスイス・ジュネーブです。世界YWの目的は、世界中の女性と少女たちの力を集めリーダーシップを養成しすべての人々にとって正義・平和・健康・人間の尊厳・自由・環境への配慮を実現することです。活動は各国YWからの会費・寄付・人材派遣などで成り立ち、世界各地のYWでは現在HIV、AIDS、暴力・貧困・差別等女性や子供を取り巻く問題に対しそれぞれの国の状況に応じたプログラムを提供しています。

日本YWの歴史に触れますと、日本YWは1905年に正式発足しました。1903年日本在住の女性宣教師たちの熱心な要請により、アメリカとカナダから幹事が派遣され、英語や聖書研究の集会、女子大やミッションスクール等への訪問活動がなされました。日本YW発足時は外国人主導の運営で、専門教育を受け経験豊かな幹事が次々と派遣され「会員や幹事の働き方」「民主的組織運営の仕方」等を教えました。

その人件費はすべて本国の負担に由り、中でも1914年東京YWに無給幹事として就任したカナダ人エマ・カフマンは莫大な資産と全エネルギーを捧げ日本YWの発展のために働きました。東京YWは現在も「カフマン・ホール」という名を記念として残しています。元来、外国人幹事の目的は、就労数は増えているのに労働環境の整っていない女性工場労働者のために働くことでした。工場講話会等を開いて聖書の話や讃美歌合唱などをしましたが、精神的な慰めを与えるに留まり、労働状況改善そのものには取り組むことができませんでした。1923年の関東大震災では駿河台の本部、東京YW、横浜YWの会館等が全焼しましたが、東京YWは震災の翌日には衣類を集めて配り、焼け跡に仮小屋を建てて食堂や公衆浴場を作り、被災者に提供しました。1912年頃から横浜、大阪、神戸と次々にYWが誕生して1925年、第1回の全国総会開催時には都市YW5、学校YW28、会員数6,000名、日本人幹事45名、外国人19名という規模になっていました。1937年日中戦争が始まり、日本YWは国際団体、キリスト教団体としての特質を保持しようと努力しておりますが、欧米系団体として危険視されることを避け1940年、世界YW、世界キリスト者青年会との交流を中止し、国際団体としての特質を失い、キリスト教団体の本質を歪めつつも、しかしその中で可能な限りの活動を続けました。

敗戦後、「民主主義」の指導者としてYWは活動します。1946年8月高知で、10月に山梨でYW主催の初等教育研究会が開かれました。民主主義を教えなければならなくなった若い女性教師たちのために山梨では6泊7日お寺や清泉寮、富士見高原教会などを会場に1962年まで16回にわたり続けられました。山梨英和の卒業生や生徒たちも炊事などの身の回りの世話を担当し、講師として日本YW総幹事、後に英和の校長でいらした内藤正隆先生や榎本愛子先生などにより民主主義とは何か、国際教育の重要性、児童と教育、聖書研究等がされました。始めて聞くキリスト教に対して多くの質問が出され、教師であることを掘り下げて考えると、信仰と愛と希望の上に立たなくては職務を全うできないということを真剣に考えさせられたそうです。この研究会のお世話をした山梨英和女学校の卒業生たちと、日本YW会長植村環などを講師に文化講座を開催していた女性たちとで1947年12月、甲府YWが誕生しました。

1963年デンマークで開かれた世界総会では核兵器反対だけでなく原子力の平和利用をも含む核の使用に反対する発言を日本代表の関谷綾子がいたしました。核の平和利用がもてはやされていた当時、原子力発電にも反対したことは一般社会の認識を超えるもので「YWの人は原爆と原発の違いが分かっていない」とも言われたそうです。国内では憲法改定の声が強くなり黙っていること自体が憲法改定を認めることだとこの自覚が生まれてきました。そこで憲法を学ぼうと「キリスト者と憲法」研究会が行われました。それが40年近く続く「憲法研究会」の始まりです。1970年代初期の憲法研究会は「核否定の思想に立つ」をテーマに取り上げ、全国総会での強調点は「核否定の思想に立つ」でした。その趣旨説明では「人間の作りだした核エネルギーはひたすら軍事的に利用され、強国は核を敵の絶滅を目的にあらゆる知識と技術とを集約的に投入している」と指摘し、「そのことに目をつぶって原子力の将来を夢見ることではできない。それでは核問題の本質を理解することはできない」と核の本質に疑念を投

げかけ「人間の良心、人間を尊重する立場に立って核を否定する一人ひとりの思想に立つ以外にない」という姿勢でした。この「核否定の思想に立つ」はYW運動の象徴ともなる言葉になりました。

しかしこれを具体化することは大変難しく、1971年日本YWではとにかく広島に行って被爆の実態に触れようということで、広島行きが実施されました。それが今に続く「ひろしまを考える旅」です。今年も英和中高生徒5名参加し、甲府YWでは少しばかり補助を出すことができました。この「旅」は原発事故、湾岸戦争、劣化ウラン弾などその時々 の出来事と「ひろしま」を結び付けて「旅」を企画していますが、今年は韓国強制併合100年で「日韓ユースカンファレンス」という日韓の若者の集いと合併して「あの日被爆したのは日本人だけ？」というテーマで開かれました。全国、世界各国から成人、学生、中高生が100人以上集い、講演、討論、ワークショップ、碑めぐり、被爆者の証言を聴くなどが行われました。40年の間にはりピーターもあり「旅」に参加した高校生が卒業後、企画委員に参加するようになってYWに繋がることにもなりました。

ここで甲府YWの活動の中心である「原爆絵画展」のことをお話ししたいと思います。1974年広島NHK放送局へ原爆の惨事を一人の市民が描いて持ち込んだのがきっかけで「市民の手で原爆の絵を残そう」という運動が起こりました。生まれて初めて絵を描いたという人も多く素人の素朴な絵ですが、再びこのようなことを繰り返してはならないという深い思いがにじみ出ており、いつ見ても心を動かされるものです。「核否定の思想に立つ」を具体的活動に展開する一つとして、1976年神戸YWがこの絵を借りて「原爆絵画展」を行いました。78年には京都、名古屋、大阪YWが加わり81年には甲府、84年には静岡が加わり「6市YW原爆絵画展」となりました。当初の絵は原画でしたので神戸、大阪、京都、名古屋と手渡しで受け渡しました。ある時は展覧会が終わったその足で広島へ絵画を返しに行き、原爆資料館の見学をしてきたという話を聞きますと若い頃のエネルギーな先輩たちの活動に頭が下がります。甲府での第1回は1981年8月21～23日、山梨県ボランティアセンターで開かれました。ヒロシマ市民の描いた絵100点、県内在住被爆者34点、ヒロシマ・ナガサキの写真パネル35点が展示されました。講演やパネルディスカッション、原爆映画「ピカドン」の上映、加害者立場から戦争の悲惨さを訴える「侵略」という映画も上映することができました。山梨県在住被爆者団体「甲友会」の方々とは永くお付き合いが続き現在でも絵画を借用したり被爆証言をお聞きしたりしております。教会、山梨英和中高、山梨YM、甲府市を始め県下15町村の市民会館、公民館、施設、会員家族など多くの男性も運搬などに力を貸して下さいました。先輩の努力により、県や甲府市の教育委員会から後援を頂いており、小中学校の子供たちにお知らせすることが出来ます。教育委員会の後援を頂いているというのは他のYWでは考えられないことのようにです。第7回からはすでにマンネリ化を感じ、英和中高のボランティアグループひまわりの皆さんとの協働によって若い人々をターゲットにしたイベントを考え実施しました。1988年第8回のエクラン会場では、駅ビルであり、お盆だったことも幸いして3日間で700人という来場者が記録されました。マンネリ化を防ぐために展示や催し物に工夫をしています。韓国、朝鮮人被爆者、沖縄にも目を向け事前に学習したものをリーフレットにして配布し、平和教育に使って頂きました。丸木位里、俊作の「原爆の図」パネルは丸木美術館より毎年お借りしています。コソボ、チェリノブイリ、イラク、東ティモール、パレスチナなどその時々問題になっていることを取り上げ、子供たちが戦争や核等によって如何にひどい被害を受

けるかという事を訴えて参りました。また「核年表」を作成し、核実験やそれによる被害そしてその時の日本YWとしての活動を纏めました。この7月末に28回目を開催しましたが、残念ながらこの数年来場者の数は減り続けています。しかし長く続けておりますと子どもの頃親に連れられて見に来られた方がお母さんになって子どもに見せたいと思ってやって来る、そんなこともあります。戦争、原爆といっても人々の関心がとても薄れていると感じます。特に若い人たち、子どもたちに何とか戦争のこと、原爆のこと憲法9条の大切さを知ってもらいたいと思っています。日本Yでは「広めよう憲法の大切さ」ということで、若い人たちに優しい言葉で分かりやすく憲法9条を伝えようという運動をしています。

若者向けにホームページに「原爆展」の情報を載せたり、子ども向けパンフレット「平和を作るワークブック」を作ったり、今年はシンガソングライターの中村里美さんのピースライブ「歌と語りで伝えるヒロシマ・ナガサキ」を開催しました。今回のライブの記念に「被爆アオギリ二世」の苗木をいただきましたので、いつも原爆展のお手伝いをしてくださる英和生に覚えてほしいと山梨英和の校庭に植えさせていただくようお願いしています。

原爆展は資金作りに苦勞して、バザーやチャリティーコンサート、ひとり芝居、原爆で死んだ子どもへの思いを綴った朗読劇「この子たちの夏」の上演などもしてきましたが、力不足で最近ではバザーの開催も難しく、開催資金は会費や寄付に頼ることになってしまいました。1970年代には全国8,000人の会員が今は3,000人と減少、どこのYWでも会員数減少に伴う活動資金不足で、日本では「ファンドレイジングマニュアル」を作って資金調達のノウハウを教えてくれたりもしますが、甲府YWの原爆展にはいつも大勢の方々心が寄せて下さって感謝しております。

現在、各地YWの活動は多岐に渡っています。高齢者施設の開設、食事サービス、障害者の働けるカフェ開設、共同作業所の手伝い、統合教育、子ども支援では不登校児、子と親、若者のためのフリースペースの開設、そして各種キャンプ。DVやHIV、ホスピスなどに関する講演や相談、また英会話、ハングル、日本語、朗読、聖書、食の問題などの講座。難民や留学生のためのバザーや母親代わりなど…ご紹介しきれませんが、地域や時代の要求にあった活動がされています。今会館を持っているYWや事業を行っているYWは、公益法人新法への対応に苦慮しています。また沖縄YWは基地問題で大変苦難の中にあります。

また、各YW独自の活動の他に、日本YWの活動を資金面で支えています。会費納入の他に災害地、紛争地域への募金や署名活動をしします。日本YWとの共同で要望書や請願書を内閣その他に出すこともあります。また特にパレスチナYWとは深い関係にあります。国連の難民救援計画の一員として世界YWがいち早く参加して以来日本YWは人権を考える委員会でパレスチナ問題を取り上げパレスチナ訪問支援プロジェクトを立ち上げ募金活動、情報発信を行いました。またパレスチナYWと東エルサレムYWの呼びかけに応じイスラエルの占領により根こそぎにされたオリーブの木を植えるという「オリーブの木キャンペーン」を続けています。このキャンペーンは2000年より始まりました。一口3,000円の募金で1本のオリーブの木が植えられるというもので、個人やグループの援助をお願いしているところです。しかし、残念ながら新しく植えられた苗木もイスラエルの兵士に根こそぎにされているところもあるとか。今総会期の日本YWの主題は「平和を実現する人々は幸いである。イエス・キリストに学び共に生きる世界を実現する。世界の人々と共に人権、平和、環境の問題に取り組む」としています。「南京を考える旅」と題して中国YWとの共催で南京市訪問や韓国